



Title	<書評> Ricoeur, P., "Le Self selon la Psychanalyse et selon la Philosophie Phénoménologique, Ecrits et Conference", Seuil, Paris
Author(s)	塩飽, 耕規
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 217-221
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11144
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Ricoeur, P.

Le Self selon la Psychanalyse et selon la Philosophie
Phénoménologique, Ecrits et Conference, Seuil, Paris

塩飽耕規

フロイト最後の理論的著作『自我とエス』（一九二三）において、自我、超自我、エスという各々独立した審級が体系立てて論じられて以来、この三つの審級のいずれに強調点を置くかによって、フロイト以後の精神分析のいくつかの流れが形成されてきた。例えば、ハインツ・ハルトマン（二八九四／一九七〇）、アンナ・フロイト（一八九五／一九八二）らが中心となって発展した自我心理学は、まさに自我の機能を探求することを主眼としていた。彼女らが精神分析を導こうとする方向ははっきりとしており、「実際に精神分析的に研究することができるのは、エスではない。超自我でもない。研究できるのは自我である」（A・フロイト「九三六」外林大作訳『自我と防衛』誠信書房、一九八八、八頁）といわれる。一方、積極的な解釈的介入による子どもの空想的世界との交流を行い、エスの、より正確には本能的欲動の生得的根源性と超自我形成過程を主題化したのが、メラニー・クライン（一八八二／一九六〇）を中心とする対象関係論である。

自我、超自我、エスについてのフロイトが行った以上に込みいった検討は、他方で各々の審級の機能と病理的現象とがいかに関連するのかを探る研究と緊密に結びついていた。それゆえ、フロイトの提唱した心的装置のみをもってして説明するには十分ではない症例が認められるやいなや、この三つの審級を補足しようとする動きがあらわれる。その動きの現代において最も有力な勢力が、ハインツ・コフト（一九一三／一九八二）によって構築された自己心理学で

ある。コフトは、自己愛パーソナリティを持つとされる症例を多く分析する中で、これまで精神分析が顕在的に取り扱わなかった自己 self を問題にした。彼いわく、「自我、イド」「エスと同義」、超自我は、精神分析学上の特異な、高い水準の、つまり体験から遠い抽象物である：ところが、自己は精神分析状況で現れてくるし、精神装置の内容として、比較的低い水準の、つまり比較的体験に近い、精神分析的抽象物という様式で、概念化される」(H・コフト「一九七一」水野信義・笠原嘉監訳『自己の分析』みすず書房、一九九四、二頁)。

ポール・リクール(一九一三/二〇〇五)の論文「精神分析における(自己)と現象学的哲学における(自己)」は、コフトの自己心理学についての考察である。この論文の初出は、一九八六年に出版されているアメリカの学術雑誌「精神分析研究」であり、その時は英語で掲載されている。その後、フランスの哲学研究者にとっては容易に入手できなかったこの論文は、リクールについての研究に組み込まれることなく忘れ去れていたが、二〇〇八年三月に出版された彼の遺稿集、『論文と講義1/精神分析をめぐって』のなかにフランス語で再録された。

リクールは、彼の主要著作のひとつにあたる『解釈について/フロイト論』(「一九六五」久米博訳『フロイトを読む』新曜社、二〇〇五)がフランス精神分析において黙殺されて以来、精神分析について表立って論じることは一切なくなっていた。ことに母国語でフ

ランス人読者を想定した論文を発表しなかったことにかけては、徹底していたと思われる。しかし、この遺稿集の出版により、彼の精神分析論が多面的に再評価される可能性がでてきた。なかでもこの「精神分析における(自己)と現象学的哲学における(自己)」は、『解釈について』の単なる要約や部分的補足にとどまらず、次の二つの点においてまったく新しい議論を提示している。(1)この論文は、『解釈について』のなかで宣言されている文言、すなわち「本書が研究対象とするのはフロイトであって、精神分析ではない。それは本書に、精神分析の実地経験と、ポスト・フロイト派への考慮の二つが欠けていることを意味する」(前掲書、一頁)という自らの制約を超え、積極的にポスト・フロイトの理論を取り上げているという点、(2)コフトの治療技法とフッサールとレヴィナスの主題との関係性を論じている点である。以下、この二つの焦点に絞って論文を紹介する。

(1)リクールは、フロイトの精神分析からコフトの自己心理学への理論的展開における注目すべき転換点は、治療としての分析技法の位置づけであると考えている。いわく、「フロイトは、本質的に、認識の機能を分析そのものへ割当てた。つまり、《聡明や lucidité》(awareness)の領野を拡大することが問題となるのである」(一四四頁)。他方、「認識の過大評価に対し、自己心理学は共感 empathie の欲求を対置させる」(一四五頁)。すなわち、フロイトとコフトの根本的違いは、分析の目的を認識の拡大、つまり無意識の意識化に

よる治癒とみなすか、共感による治癒とみなすかということになる。ただし、コフートの共感はこの二つの様相をもつということが強調されねばならない。「治癒の対象としての共感と、治癒の手段としての共感」(一五一頁)の二つである。

共感が治癒の対象となるといふことや奇妙だが、これは、コフートの次のような考えをもとにしている。すなわち、人生再早期の自他が未分化な時期、最も強烈な自己愛体験の最中であつて、幼児は何らかの対象と関わっており、その対象は対象でありながら自己の重要な部分として体験されている。そのような対象をコフートは自己・対象 *self-object* と呼び、自己そのものと区別した。おそらく、その対象とは母親の身体になるであろうが、コフートは自己と自己・対象との関係を問題するのであつて、その自己・対象と呼ばれるものがいかなる客観的对象であるかということとは問題視しない。その自己・対象が幼児の体験にとつていかなる価値を有しているかということがこの場合重要なのであり、その意味で、この自己・対象という一見相反する概念をハイフンで繋げただけのようにみえる彼独自の概念は、視覚や触覚、嗅覚などによつて自己と区分される対象というよりも、感情の対象ということになる。つまり、幼児期における自己愛体験と考えられるものは、感情の出発点と、その感情が向けられる終着点とが、どちらも自己と結びついているということなのである。そしてまさにコフートは、この自己と自己・対象との関係性のことを指して「共感」と呼んでいるのである。この自己と自己・対象との切り離しがたい内的関係(≡共感)が、患者と治

療者の関係性において再活性化されると考えられるため、それが治療の対象になるといわれるのである。

その患者の自己と自己・対象との間の個人的色彩をもつ共感に接近する方法が、治療者が患者へ向ける手段としての共感なのである。もちろん、リクールがここにディルタイ以来の「追体験」をめぐる解釈学的循環が構造上発生していることを見てとらないはずはない。しかし彼は次のようにいい、自己心理学はこの難題をあらたな視点へもたらずと考える。「分析家は、被分析者の自己愛転移「治療関係において活性化された自己・対象が分析家と重ねあわされること」に対して共感をもつてして応答する。その際分析家が、逆転移「分析家の自己愛に起因する心的葛藤が、被分析者へ向ける注意や共感を妨げるような拒絶などとしてあらわれること」に屈しないようにするならば、共感、分析家を置き換えられた自己・対象にすると同時に正当化される資格を有する科学的観察者にするのである」(一五〇頁)。要するにリクールは、分析家が単に解釈学的循環を是認せざるを得ないと考えることよりも、彼らが「理解と説明の葛藤」(一五〇頁)を体現している点を積極的に評価するのである。

(2)ところで、コフート自身、この方法としての共感を「共感的共鳴 *empathic resonance*」もしくは「反響 *consonance*」とも言い換える。リクールは、この表現に注目し、次のようにいつている。「フツサルが対化 *Parung* と呼ぶものと、コフートが反響や共鳴と呼ぶものの中に、私は、かなり強い親和性を発見する」(二五九頁)。フツサルの「対化」とは、目の前の他者の身体が、自己の身体と

の類似性によって互いに生き生きと呼び覚まされ、両者が同じ意味をもつものとして知覚されるための根拠となる現象を指す。その際この統覚は、目の前の対象に注意が向けられていようがいまいが、直感的に与えられる受動的総合の形式としてフッサールによって強調される。リクールは、この対化現象を、「一種の共鳴によって他者の身体との親和性を強く感じる事」（二五八頁）だと捉え直そうとする。このような捉え直しによって、フッサールの議論を、物体としての身体の知覚のレベルだけにとどまらず、同時に感情のレベル、心理的レベルでも他者との対化が起こっている可能性を検討することを許すのである。さらに、この照らしあわせのおかげで、「発生的現象学の観点からみた発達の局面が、幼児・親カップルへと結びつく間主観的關係の始源的形式に関わる有益な情報をもたらす」（二五九頁）とリクールは考える。

フッサールの他者論との対比に続けて、リクールはコフートの自己・対象概念をレヴィナスの他者論とつきあわせる。彼は、レヴィナスの徹底した自他の非対称性を確認しつつ、それと対置する形で、コフートの自己・対象といわれるものがいかにその本質をあらわすかを示している。

「自己心理学が徹頭徹尾主張にするのは、敵対関係に対する応答、支持、援助の優位である。（健康な *sain*）自己・対象は本質的に凝集的自己 *soi cohésif* に対して支持的（*supportive*）なのである」（一六四頁、強調リクール）。凝集的 *cohesive* という形容詞は、コフートが頻繁に用いるものであり、断片化 *fragmentation* の反対語とみなされて

いる。とりわけ凝集的自己という用語は彼の重要概念であり、構造化された体験、安定性を伴う自足した体験内容が自己と結びついている状態のことをいう。リクールの考えでは、（健康な）自己・対象とは、「蒼古的 *archaïque* 自己・対象の代理であるだけでなく、自己・対象の延長であり、変貌である」（二六五頁）。具体的にいうと、蒼古的自己・対象とは、母もしくは父を指し、その代理、延長、変容とは、ある個人が成長するにしたがってその都度見出される重要人物（とその個人によって感じられる人）を指すと考えてよい。リクールの考えを参考にすると、よりよく統合された自己というものは、彼（彼女）の体験を通じて自己・対象として再発見されている誰かなしにはありえないのである。これはある意味で、「みずからのうちに成熟 *maturité* というア・プリアリなものを要請する発達の内的目的論」（二六五頁）を前提にしている。

しかし「コフートとは異なり、実際レヴィナスが強調点をおくのは、双子のような二つの主体の類似 *ressemblance* ではなく、教えを施す顔の尊大さである。：道徳哲学者にとり、教示する顔の尊大さは、意味の内包においてあらゆる類似の關係に先立つ。彼にとつては、相似の關係 *relation de similitude* が、自己・対象と融合しようとする自己の傾向性から切り離される場合にのみ、他なるものは私の同胞 *mon semblable* となるのである」（一六四頁）。このリクールの言い回しは実に意味深長であって、いかなる点でコフートがレヴィナスの思想を裏切るのか、また逆に結びつきうるのかを見極めるのは難しい。コフートの概念体系のなかでは、自己は自己・対象を求めて

やまず、それが彼の考える自己の本質であるのは確かである。コフ
ートは、「正常な心理生活の特徴づける発達は自己が自己対象を放棄
することではなく、自己と自己対象との関係の質の変化のなかに存
在していなければならない」（一九八四）本城秀次・笠原嘉監訳『自
己の治癒』みすず書房、二〇〇二、七一頁）と主張している。もし
も自己・対象が見出されなければ、凝集的に体験されるはずだった
自己は断片化と非連続性のうちに退行すると考えられる。しかしな
がら、リクールのいう「相似の関係が、自己・対象と融合しようと
する自己の傾向性から切り離される場合」とは具体的にいかなる場
合でありうるのか確定しがたい。そもそもリクールのいう「類似
resemblance」や「相似 similitude」、そして「同胞 semblable」という
言葉の意味内容はこの論文からだけでは推測できない。この点は彼
のレヴィナス解釈を再検討し、評価し直す必要があるだろう。また、
例えば「自己と自己対象との関係の質の変化」というコフートの言
葉によっていわれている事態が、具体的な分析場面に基いて記述
され、精査されるならば、リクールの指摘以上にレヴィナスの他者
論との生産的な突き合わせが期待できるであろう。というのも、お
そらく「自己と自己対象との質の変化」という言葉で指し示されて
いる場面は、リクールのいうような「相似」関係から「同胞」関係
への移行、さらには、闘争関係から相互承認関係への質的变化を射
程にいれた自他関係を考慮に入れることは十分にできるであろうか
ら。

今後は以上のような観点をさらに明確にし、リクールの文献研究

と現代精神分析のさまざまな知見の再評価との両方の方向から、さ
らに現象学と精神分析の問題系の重なりへ光をあてることが期待さ
れる。リクールのこの論文は、そういった研究領域のひとつの指針
となるはずである。

註

- ・リクールが用いているコフートの専門用語を訳す際には、
水野信義・笠原嘉訳に従った。
- ・リクールの著作および論文以外の引用は邦訳のみ参照。

引用・参考文献

- Freud, A., 1936, *Das Ich und Abwehrmechanismen*,
Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (フロイト
一九八八) 外林大作訳『自我と防衛』誠信書房
Husserl, E., 1977, *Cartesiansche Meditationen Eine Einleitung
in die Phänomenologie*, Hamburg, Felix Meiner. (フッサール
二〇〇二) 浜渦辰二訳『デカルト的省察』岩波書店
Kohut, H., 1971, *The analysis of the self*, New York, International
Universities Press. (コフート一九九四) 水野信義・
笠原嘉監訳『自己の分析』みすず書房
———, 1984, *How does analysis cure?*, Chicago and London,
The University of Chicago Press. (コフート二〇〇二)
本城秀次・笠原嘉監訳『自己の治癒』みすず書房
Ricoeur, P., 1965, *De l'interprétation essai sur Freud*, Paris,
Seil. (リクール二〇〇五) 久米博訳『解釈について：
フロイト論』新曜社